15

『胎産新書』諸本について
――中島家所蔵本を中心に――

清水　信子
北里大学東洋医学総合研究所 医史学研究部

○難波抱節と『胎産新書』

難波抱節（寛政三・1791～安政六・1859，通称立愿，諱経恭，字子敬，号抱節）は，備前に生まれ，京都で吉益南涯に内科を，賀川蘭斎に産科を，大坂で華岡青洲に外科を学び，郷里にて開業する一方，学塾思誠堂を開き，その学を広めた．また後，緒方洪庵から種痘術を学び，種痘の普及にも努めた．

『胎産新書』は，江戸時代後期，嘉永から安政年間に成立した産科書で，全十巻，「産前門」上下「臨産門」「変生門」「産後門」「血證門」「嬰児門」「雑門」「手術門」「図式門」「方剤門」の全十門からなる．刊行はされず，写本でのみ伝存し，その伝本は，京都大学付属図書館富士川文庫本，杏雨書屋乾々斎文庫本，正宗文庫本，岡山市立中央図書館本，中島家所蔵本の五点が確認される．それら諸本には少なからず異同があり，本書を研究する上では，まずはそれらの伝写関係，及び成書過程を解明し，定本の確定が必須となろう．中で，中島家所蔵本は，諸本に見えない序等著録内容が多い．そこで本発表においては，中島家所蔵本の概要を紹介するとともに，その他諸本との関係を考察していく．

○中島家所蔵本とその他の諸本

中島家は，抱節と同じく備前，岡山に十代続く医家である．三代宗仙（安永三・1774～天保十一・1840）は，寛政十二年（1800），吉益南涯に入門し，その子友玄（文化四・1807～明治九・1876）は，天保三年（1832），南涯男北洲に入門しているが，抱節もそれらと相前後して，文化八年（1811）年に南涯に，文政十一年（1828）には，南涯に続き北洲にも入門している．その関係から，同家と抱節とは接点があったと思われる．

中島家所蔵本（以下略中島家本）は全十巻（巻九闕）存九冊．第二冊のみ，抱節の私塾「思誠堂」用箋を使用した別筆で，印記「備前金川／難波蔵書」があることから，該冊のみ，著者抱節旧蔵書が混入したと見られる．著録内容は，まず，嘉永七年多紀元堅序，天保十四年源宜序，帆足万里序（年代不明），天保十五年自序，安政二年難波経直（抱節男）序の五序があり，続いて「例言」，「引用書目」があるが，諸本の中で，五序，「例言」「引用書目」が備わるものは類を見ない．巻一以降本文における第一の特徴としては，各巻首の著者事項の記載で，他本は著者難波抱節の名を記すのみであるが，中島家本には校訂した門人の名が列記されている．これは中島家本が校訂を経た成書過程の最終段階であったことを意味するものであろう．その他，序，本文には，朱筆にて，返点，送仮名，また一部には和訓が書入れられているが，これらは全冊同筆によることから，本文書写後に改めて書入れられたものと見られる．

諸本との関係について，例えば正宗文庫本は，眉欄には校異が記されており，諸本の伝写関係を知る上で注視されるが，それらは中島家本とは必ずしも一致しない．その他中島家本と比校すると，所載子目については，概ね一致するものの，その所載順等若干の異同があり，また本文には中島家本に無い記述も見られ，その他の諸本との関係を詳察しなければならない．

以上，『胎産新書』諸本の中で，中島家本については，自序をはじめとして各者の序を多く備えていること，また本文凡例としての「例言」，「引用書目」が付されていること，さらに巻首の著者事項にあるように門人による校訂を経ていることから，諸本の中でも，最終稿と看做され，『胎産新書』定本として，その研究に資する一本と言えよう．

（本発表は，文科省科研費助成・基盤研究（C）「江戸時代における地域医療研究～岡山県邑久郡の中島家をもとに～」（研究代表者：松村紀明，課題番号 23501206）による研究成果の一部である．）